



庭と園に学ぶ

～近世と近代～

2023 18:00-19:30

9.25-11.13

Every Monday

参加費無料

定員 **300** 名

※参加登録制
(非会員も参加可)

参加登録



[https://forms.gle/
KmxiSFNuhhncVgck9](https://forms.gle/KmxiSFNuhhncVgck9)

- | | |
|-------|------------------------------|
| 09.25 | 鉢植が並ぶ庭 |
| 10.02 | 江戸大名の庭と上水 |
| 10.10 | 近世大名庭園の考古学 |
| 10.16 | 城下町金沢の遥拝と庭園 |
| 10.23 | 近代・東京の庭師と数寄者 |
| 10.30 | 日本庭園にみられる
日本とフランスの剪定方法の比較 |
| 11.06 | 雑木の庭と、にわアラカルト |
| 11.13 | 東京臨海部の潮入りの庭と都市計画 |

- | |
|---|
| 平野 恵 氏
[台東区中央図書館 郷土・資料調査室] |
| 内藤 啓太 氏
[法政大学 デザイン工学部 建築学科] |
| 谷川 章雄 氏
[早稲田大学 人間科学学術院] |
| 鏑 隆弘 氏
[金沢美術工芸大学 ホリステックデザイン専攻] |
| 松本 恵樹 氏
[(有)春秋設計工房/東京農業大学客員研究員] |
| 石井 匡志 氏
[アゴラ造園(株)/一造会幹事長・フランス海外研修団長] |
| 岡島 直方 氏
[南九州大学 環境園芸学部 環境園芸学科] |
| 竹内 智子 氏
[千葉大学 園芸学研究院 ランドスケープ・経済学講座] |

日本庭園学会は、日本庭園を多方面から総合的に研究・討議するとともに、日本庭園を軸として日本文化について考究することを趣旨としています。

本学会では、日本庭園の研究を造園の専門分野のみからアプローチするのは不十分であると考えます。建築・考古の分野はもとより、生活文化としての茶道・華道、あるいは精神文化としての哲学・宗教、特に仏教文化の分野、さらに美術・工芸、絵画等々、多方面から行われてこそ、はじめてその完きを得るものと考えます。そのため、本オンラインセミナーでは、多彩な分野の先生に御講演をいただき、日本庭園学の深淵に触れる企画としています。

本セミナーは学会主催ですが、会員のみならず広く一般の方に向けて、様々な**実践智**(現場の肉声)と**思考智**(研究の成果)をわかりやすく話題提供し、日本庭園学のこれまでとこれからを展望していく内容です。

Zoom開催のため、参加登録制*にて、毎回どなたでも、世界中のどこからでも、視聴・参加可能。

多くの方々の参加をお待ちしております。

※参加登録制について:開催期間内であればいつでも登録可能。一度の参加登録で全ての回を聴講可能。

Form 利用できない方は、①お名前 ②ご所属 ③ メールアドレス ④会員 / 非会員 を記載の上、日本庭園学会オンラインセミナー事務局(teienzoom@gmail.com)までお申込みください。電話・郵送でのお申込みに応じられません。

庭と園に学ぶ

～近世と近代～

9月25日 「鉢植が並ぶ庭」 平野 恵

近世後期に発達した園芸文化の背景には、植木鉢の普及がある。変化朝顔を例にすれば、鉢植で栽培することによって品種間の交雑を防ぎ、品評会に展示しやすい形態として必然的に選ばれていった。また、情報を先取りした本草学者と植木屋も、薬草・有用植物を植木鉢で栽培した。

本報告では、植木鉢の普及の結果展開した多くの文化事象を紹介し、鉢植が並ぶ植木屋や本草学者の庭および東海道を往来する人びとが休憩した沼津帯笑園の事例を紹介する。

10月2日 「江戸大名の庭と上水」 内藤 啓太

江戸の多くの大名藩邸では、池を中心に配した庭がつくられ、立地する地形によってさまざまな水利用があった。上水も、そうした水のひとつであり、飲料水として江戸の市街地を潤した一方、庭園都市と称される江戸の形成に重要な役割を果たした。本講演では、江戸の上水制度やその給水範囲を踏まえつつ、上水によって庭にあらわれた水の景観を紹介しながら、江戸大名の庭における上水の意味について考えてみたい。

10月10日 「近世大名庭園の考古学」 谷川 章雄

今も残る江戸や国元の大名庭園の多くは、史跡・名勝などに指定された文化財庭園であり、その整備にあたっては発掘調査が行われている。また、江戸や国元の城下町では、大名屋敷の庭園の遺構が発掘されている。ここでは、こうした大名庭園の考古学について考えて見たい。 ※10月9日が休日のため火曜日に開催

10月16日 「城下町金沢の遥拝と庭園」 鏑 隆弘

金沢の街は、街路を中心に江戸期の形を多く残している。庭園としては藩主加賀前田家の兼六園、家老本多家の松風閣庭園、中級武士寺島家の乾泉庭や脇田家の玉泉園が現在も残っており、江戸期の様相を伝えるものとなっている。近年に金沢城の一廓に再現された玉泉院丸庭園では庭園の外の対象を遥拝する形が見られる。他に街中においても起伏の多い地形を活かした月見の場などがあり、街にも庭園的な様相が見られる。今回は城下町金沢の特徴的な形として紹介する。

10月23日 「近代・東京の庭師と数寄者」 松本 恵樹

明治、大正、昭和と東京の下谷根岸で活躍した庭師、2代松本幾次郎と弟の松本亀吉の人物像と作品について紹介する。2代幾次郎と亀吉のパトロン的存在であった近代数寄者の益田克徳と高橋箒庵との親交等についても紹介する。

10月30日 「日本庭園にみられる日本とフランスの剪定方法の比較」 石井 匡志

フランスの日本庭園では、段づくりや玉ちらしなどの樹形に仕立てられた樹木がみられる。ジャルディニエ(フランス人庭園管理技術者)の間で「すかし」や「にわき」という剪定方法が認識されている。しかし、多くのジャルディニエは日本人から直接指導を受けた経験がない。その結果、段づくりや玉ちらしはジャルディニエの理解によりフランスの剪定技術と融合した特有の樹形となる。フランス渡航し、ジャルディニエと共に剪定をしながら感じたことを含めて、ジャルディニエ達の樹形の捉え方やフランス特有の剪定方法について話す。

11月6日 「雑木の庭と、にわアラカルト」 岡島 直方

最初に現在の庭園学会の会員の方の仕事の中で、私が銘記していることについて話し謝意を表明したいと思います。その後、当方が雑木の庭について調査した約30年前の状況について話したり、庭と連動して捉えられるさまざまな活動や事象について触れたりしていきたいと思っています。例えば自然風を実現するために観察者(作家)飯田十基が見たと思われる風景とは、日本文化の中に流れ込んでいる聖書的世界観、建築家の作った庭、などについても話してみたいと思います。

11月13日 「東京臨海部の潮入りの庭と都市計画」 竹内 智子

江戸は水運が物流の中心であり、町中に水路が張り巡らされ、海辺には多くの潮入りの庭園がありました。干満に合わせて海水が園内の池に出入りし、当時は生活の場だけでなく釣りや舟遊びも楽しまれていました。「潮入りの庭」は、景観の変化をもたらすだけでなく、潮の干満により生物多様性も育み、都市にとっても様々な意味をもって作庭されていました。当時の潮入りの庭の機能について紹介するとともに、現在の東京の都市計画の中で文化財庭園がどのように捉えられているのかについてお話しします。